

2019年1月11日 (金) 15時～18時 開場：14時40分

宮城学院女子大学 講義館 C 602教室



シンポジウム 声を聴く 声をしるす

～21世紀教養教育考～

～パネリスト (登壇予定順)～

- 「古文書」に聴く (日本近世史) **菊池勇夫氏**
宮城学院女子大学名誉教授。
自治体史の編さんから歴史の仕事にスタート。
生活世界から国家や社会を視るというスタンスを取る。
近著に『非常非命の歴史学』『探究の人菅江真澄』など。
- 「ことばの教師」に聴く (言語教育学) **今中舞衣子氏**
大阪産業大学准教授。
論文「NHK フランス語教育番組における出演者の役割の歴史的変遷」で
日本フランス語教育学会 SJD 奨励賞・発表部門受賞 (2017年)。
- 「子ども」に聴く (子ども支援学) **安部芳絵氏**
工学院大学准教授。
単著『災害と子ども支援』で第12回こども環境学会論文・著作賞
& 第11回生協総研賞研究賞受賞 (2017年)。
調査で出会う子どもたちから元気をもらう日々。

【モデレーター: 間瀬幸江 (宮城学院女子大学准教授, フランス文学, 語学教育)】

MG一般教育

検索

◇◇聴講無料、事前申し込み不要◇◇

大学における教養教育の目的は、「民主的社会」の実現と、その展開を担う「民主的市民」の形成です(※)。

世界と社会をはかる尺度の多様化・多元化が加速する21世紀、この「市民性」獲得のツールとして「社会人基礎力」や「汎用性スキル」などの育成が、推奨されるようになりました。

では、こうしたツールを使う「私」を育むために、21世紀の教養教育はどうあるべきか。

研究と教育実践の両方の領域で、他者の声を「聴く」ことを重視してきた、専門の異なる3人のパネリストにご登壇いただき、この問いに向かいます。

学内教職員の皆さま、学生の皆さま、学外の皆さま、どなたでもご来聴を歓迎いたします。

※「日本の展望—学術からの提言2010 21世紀の教養と教養教育」(日本学術会議 日本の展望委員会 知の創造分化会、2010年)



宮城学院女子大学一般教育部
ウェブサイトにて、12月上旬から、本企画の関連情報を順次お知らせします。

問い合わせ先: 宮城学院女子大学一般教育部 企画担当: 間瀬幸江 ymase@mgu.ac.jp
〒981-0961 宮城県仙台市青葉区桜ヶ丘9-1-1 (バス停「宮城学院前」から徒歩1分)

Multilingual Workshops
Miyagi Gakuin Women's Union



タイムテーブル

- 14:40 開場
- 15:00 開会あいさつ
宮城学院女子大学一般教育部長
孝教授 田中一裕(生理生態学)
- 15:05 シンポジウム開催趣旨説明
「聞くこと」の破壊力〜共同研究の磁場〜
同大学准孝教授 関頼幸江(仏文学)
- 15:20~17:00 (15:50~16:00休憩)
- パネリスト3名によるリレー発表(以下敬称略)
- 15:20~15:50 菊池
- 16:00~16:30 今中 16:30~17:00 安部
- 17:15~17:55 全体討論と質疑応答
- 17:55 閉会あいさつ
同大学キリスト教文化研究所所長
孝教授 J. F. モリス (日本近世史)
- 18:00 閉会



私たちが書くのは、誰ひとり聴いていないからだ。
 "On écrit parce que personne n'écoute." Georges Perros (1923-1978)
 知識は語る。しかし、知性は聴く。
 "La connaissance parle, mais la sagesse écoute." Jimi Hendrix (1942-1970)
 ことばは、半分は語る側の、半分は聴く側のものである。
 "La parole est moitié à celui qui parle, moitié à celui qui écoute." Michel de Montaigne (1533-1592)

シンポジウム 声を聴く 声をしるす

〜21世紀教養教育考〜

シンポジウム参加によせて〜パネリストの皆さんの「声」〜

記録を読む、声を聴く
 一菅江真澄日記を題材にして一
 菊池勇夫 (日本近世史)



江戸時代後期、北日本を歩き、土地の人々と交わり、見たこと聞いたことを、和歌や絵とともに書き残した旅の人、それが三河の人菅(すが)江(え)真澄(ますみ)である。

このシンポジウムでは、菅江真澄の旅日記に出てくる、土地の知識、老婆、若者、娘らが発していた生の声を取り上げてみたい。一例だけ紹介しておこう。真澄が天明5年(1785)4月、秋田領の湯沢近くの柳田の里に出かけ、そこの家に泊ったのかと思われるが、翌朝、真澄が障子を少しあけて外をみると、水汲みの「めらし」(女童)が、どこの国の女かわからないが男とともに歩いていくのを見て、桶を捨てて家に駆け込んできた。そして、その娘が「あなる女を見よ、かうのけ(眉毛のこと)もなし」と驚いていい、それを聞いた「わかぜ」(若者)が「余所(よそ)国の人(ひと)はみな、このけ(け)そりぬる」というと、娘が「あな、さたけなし(恥ずかしい)」と語る。

こうした反応、会話をたとえば取り上げて教養・人文の授業の材料としてきた。ここからどのような問題を引き出すことができるのだろうか。秋田領の成人の女性は眉を剃らず、他国では剃るという違いが知られる。これをさらに東北地方についてみていけば、とくにその北半部では剃らないのが習慣であった。多くの外部からきた旅行者はそうした差異に気づき、「夷風(いふう)」などと違和感を発し、異文化感情を表出していた。真澄が他の旅行者と異なっているのは、土地の内側の声を拾い、娘の驚きに注意して書くような人だったことである。

当日のシンポジウムでは、災害や飢饉に遭った人たちの肉声のいくつかを紹介することになると思う。時空を超えて、人々の声を聴き澄ます、そういったことがどこかで教養教育とつながっている、そのような目論見をもって臨みたい。

「ことばの教師」に聴く
 一コミュニティにおける変容、継続性と
 価値の継承一
 今中舞衣子 (言語教育学)



Péka (ペダゴジーを考える会) は、東京で実施されたフランス語教員研修参加者が中心となっており、1990年にスタートした。フランス語教育に関心のある人すべてに開かれた自己研修と議論の場であり、一般的な学会や研究会のように特別な手続きを必要とせず、各々が参加したいときに例会に参加する形態で運営されている。

今回、ことばの教師による自主的な相互研修コミュニティの継続性とその変容をテーマとし、Pékaに参加する8名のフランス語教師を対象としたインタビュー調査を行った。彼ら/彼女らの声から明らかになったことは、Pékaという場が参加者の対等な関係性を重視することをコミュニティの共通意識として内包してきたこと、コミュニティの継続に危機が生じた際に何度も対話による問題解決をはかってきたこと、参加者ひとりひとりの個の主体性が様々な形で尊重されてきたことである。

教師たちはどのような視点で自らの職業をとらえ、どのような意識を持ってこの自己研鑽の場を継続させてきたのか。

本シンポジウムではこのインタビュー調査で聴き/記述した様々な声をご紹介します。教養教育における市民性形成の視点と関連づけながら考察してみたい。



子どもの声を聴き、声に向き合う
 一災害後の支援者が直面した
 「ゆらぎ」と省察一
 安部芳絵 (子ども支援学)

子どもの声を聴き、声に向き合うことはときとして支援者に「ゆらぎ」をもたらす。とりわけ災害後はそれが顕著である。このシンポジウムでは、災害後に支援者が「ゆらぎ」を感じた子どもの声をてがかりにして、声を聴き、向き合うことの難しさと聴くこと・しるすことが有する力について考えたい。

支援者の多くがゆらいだ出来事に「災害遊び」がある。2018年7月の西日本豪雨の被災地域では「流されちゃったー」と言いながらブロックや人形を倒す様子が見られた。このほかにも「地震ごっこ」「津波ごっこ」「緊急サイレンごっこ」などが報告されている。乳幼児から中学生世代まで幅広い子どもたちが「災害遊び」をしたが、支援者の対応はどのようなものであったのだろうか。

子どもたちと活動を続ける中でゆらぎが続く、もう辞めた方がいいのかな…と考えた支援者もいる。言語化できない不安や「もやもや」をノートにしるし、省察しようとするがうまくいかない。ところがあることをきっかけにして自らの支援行為を捉えなおし、子どもとの向き合い方が変化していった。それはどんなことだったのだろうか。

調査をすすめるなかで私自身がゆらいだ2つの場面も検討したい。他者の声を聴き足元がゆらぐような感覚をおぼえるとき、自らの内にある価値観がゆさぶられる。このことをよりどころとして、21世紀教養教育の基盤となるものは何か、共に考える機会としたい。

●プログラム終了後、懇親会があります●
 キャンパス内「うふカフェ」にて、会費制(1,000円程度)の懇親会を開催します。パネリストの皆さん、来場者の皆さんに、自由に意見交換をいただく場です。学内教職員の皆様、学生の皆様、学外のみならず、どなたでも参加いただけます。詳しくは当日、ご案内いたします。

